東洋経済
ACADEMIC

龍谷大学 特別編集版
SDGsに取り組む大学特集 Vol.3

アフターコロナの次代へ SDGsの実践で変革する社会

他者に寄り添う教育・研究
「仏教SDGs」のさらなる推進

2020-2030

RYUKOKU UNIVERSITY

2021年7月8日発行
『SDGsに取り組む大学特集Vol.3』
掲載（一部改変）

RYUKOKU UNIVERSITY

他者に寄り添う教育・研究の実践
コロナの時代であればこそ加速する「仏教 SDGs」

コロナ禍でいっそう高まる仏教ＳＤＧｓの社会的意義

建学の精神である「浄土真宗の精神」の下、いつの時代も教育・研究を通して社会に貢献し続けてきた龍谷大学。近年は、「誰一人取り残さない」社会を目指すＳＤＧｓと、『摂取不捨』（すべての者をおさめとって見捨てない）という仏教の考え方に共通点を見いだし、「仏教ＳＤＧｓ」という独自の視点で多様な取り組みを展開する。新型コロナウイルス感染症の発生によってさまざまな問題や困難が顕在化した中、仏教ＳＤＧｓが持つ社会的意義により大きな注目が集まっている。入澤崇学長はこう話す。

「人類は文明の発展に伴う開発行為で、地球環境に深刻な影響を及ぼしてきました。現在の世界に山積する問題の多くは人間が引き起こしたものです。そのため、ＳＤＧｓの達成には、まず私たちがどういう存在なのかを見つめ直し、社会のために尽くすことが欠かせません。こうした姿勢は今般のコロナ禍を乗り越えるうえでも、重要な意味を持っています。建学の精神に基づく本学の教育・研究は、まさしく人類の命題に応えるものと言えるでしょう」

「誰一人取り残さない」を体現した学生支援

コロナ禍においても学生の学びを止めず、誰一人取り残さないよう、龍谷大学は特別に学長補佐を据えて組織的な対応を講じてきた。２０２０年４月の初旬には、学生のニーズをすくい上げ、機動的な対応を図るための「学生応援方策検討ワーキング」を発足。学生の多くが厳しい学生生活に直面している事実を踏まえ、法人として新たに総額14・６億円の補正予算を組み、一律３万円の給付奨学金や経済支援奨学金も用意した。

そして、「新型コロナウイルス対応 学生支援募金」として学内外の個人・団体から寄付を募り、それを財源にコミュニティ形成支援などの各種サポートを実行。教員や職員、学生が一丸となり、コロナ禍がもたらした課題の解決に取り組んだ。「お互いに支え合う意識を高め、それぞれが日常生活で『誰一人取り残さない』ための行動を徹底することは、ＳＤＧｓ達成への第一歩になります」と入澤学長は語る。

入澤 崇
龍谷大学 第19代学長

同年４月の下旬には、学生の状況を把握すべく緊急アンケート調査を実施。その結果、「保護者の収入が減少した」「学生本人がアルバイトできなくなった」といった経済面の問題が明らかになるとともに、一人暮らしの学生の半数以上が食生活に不安を抱えていることが判明する。そこからスタートしたのが「食支援プロジェクト」だ。緊急事態宣言の発出中には、一人暮らしの学生・留学生に対して１回あたり５日分の食材を無償で配布した。食材調達においては、龍谷大学と連携協定を結んでいる滋賀県東近江市から１トン分の米の提供を受けたほか、農学部の実習先で栽培している農作物なども活用。利用者は１週間で１２００名以上を記録した。

緊急事態宣言解除後は、学外企業・団体と連携した有償提供に切り替えた。支援の輪は大きく広がり、龍谷大学の取り組みに賛同した航空会社Peach Aviationや大阪王将、コカ・コーラ、京都生協をはじめ、20社を超える企業・団体から食材の提供を受けることとなった。また、この段階から、配布作業に携わるアルバイトスタッフとして食支援の対象となる学生を直接雇用。日払いで給与を支給し、経済面のサポートも同時に行った。約３カ月間にわたる食支援は、深草・大宮・瀬田の３キャンパスで計25回行われ、延べ６０００名近くの学生に対し、約５万２５００食が配られた。

さらに、食によるつながりは地域にも拡大。「地域飲食店協働スキーム」として、近隣の提携飲食店で使えるクーポンを配布するなど、学生の食生活を支えると同時に、コロナ禍で経済的なダメージを受けた飲食店を支援し、地域経済の活性化を図る事業を展開した。

龍谷大学の学生支援は、経済面や健康面だけにとどまらない。２０２０年９月から、新たな通学ルートを確保し、ＪＲ大津駅前～瀬田キャンパス間における直行バスの運行をスタートさせ、３密につながる通学時の混雑緩和を図っている。コロナ禍はいまだ収束の兆しを見せないが、今後も学生、そして社会に目を向け、耳を傾け続けていく。

「食支援プロジェクト」の活動風景

「龍谷大学基本構想 400」を推進
世界の平和に寄与するプラットフォームへ

龍谷大学のユヌスソーシャルビジネスリサーチセンターと京滋3信金が「ソーシャル企業認証制度」に関する協定を締結

環境問題からジェンダーまでSDGsに資する多彩な研究

龍谷大学は、2039年の創立400周年に向けて、長期計画「龍谷大学基本構想400」を推進している。軸となるのは、自らの行いや属する集団を常に省みて、他者のために尽力する行動哲学「自省利他」。そして、この「自省利他」の心を「まごころ」という言葉に置き換えて、将来ビジョンとして「『まごころ～Magokoro～』ある市民を育み、新たな知と価値の創造を図ることで、あらゆる『壁』や『違い』を乗り越え、世界の平和に寄与するプラットフォームとなる」ことを掲げる。人類が連帯するための仕組みづくりは、コロナ禍で分断が進む社会において切実に求められているテーマだ。まさに次代の要請に応える構想と言えよう。

基本構想400では、アクションプランとして仏教SDGsの推進を挙げており、持続可能な社会の実現に資する多彩な研究が進められている。龍谷大学生物多様性科学研究センターの「環境DNA分析による生物モニタリング」もその一つ。これは河川・池・海における生態調査を生物の捕獲なしで行う技術で、コップ1杯の水をくみ、解析するだけで生態情報を大量に取得できる。例えば、外来種の増加が問題となっている琵琶湖で、その傾向を把握して早期に対策を講じたり、駆除後の経過観察に役立てたりすることが可能だ。水産資源の保全や水環境改善への貢献が期待される。

また、SDGsの目標5であるジェンダー平等はその実現が叫ばれて久しいが、男女格差は根強く残る。仏教界も例外ではない。これらの課題の解決に向けた議論を進めるべく誕生したのが「ジェンダーと宗教研究センター」だ。37名の研究員と4つのユニットからなる同センターでは、仏教をはじめとする諸宗教をジェンダーの視点から考察。男性中心の宗教界を問い直し、得られた知見を社会に還元する。ジェンダーと宗教を結び付ける斬新な試みがSDGsの達成を促していく。

ソーシャルビジネスを通して社会問題の解決に取り組む

龍谷大学は、仏教SDGsにおいて、社会問題の解決を主目的とした「ソーシャルビジネス」の起業支援に力を入れている。ノーベル平和賞受賞者ムハマド・ユヌス博士との会談を経て設立された「ユヌスソーシャルビジネスリサーチセンター（YSBRC）」は、大学と社会を結ぶ研究拠点。2020年12月には、YSBRCが京都信用金庫など京都・滋賀の信用金庫3社とともに、社会問題の解決に取り組む中小企業を可視化する「ソーシャル企業認証制度」を創設した。YSBRC内に第三者機関を設置し、3信金が計画策定や申請補助を実施。認証は企業への信用や共感を生み、地域経済の持続的成長につながっていく。

龍谷大学と協定を結ぶ兵庫県洲本市では、「ユヌスソーシャルビジネスリサーチセンター洲本ブランチ」が新たにオープンした。淡路島内の活性化事業に参加する学生・教員らの活動拠点になるとともに、地元の住民・企業がシェアするコワーキングスペースとして活用される。これまで龍谷大学と洲本市では、「龍谷フロートソーラーパーク洲本」の太陽光発電による地域活性化の財源づくりといった域学連携事業が行われてきた。洲本ブランチの誕生を機に、新規ビジネスの創出など、さらなる進展が見込まれる。

また、大学発ベンチャー企業数で関西4位の龍谷大学では、ビジネスプランコンテスト「プレゼン龍（ドラゴン）」を毎年開催している。開始20年の節目となった2020年度は前年度に引き続き、「プレゼン龍×SDGs」をテーマに設定。プレゼンテーションはオンラインで実施され、学生たちがSDGsの観点に立った多彩なプランを提案した。コロナ禍においても、社会起業家の「芽」が力強く育まれている。

心理学部の開設と仏教SDGs推進協議会の設置

コロナ禍で不安が蔓延し、混迷を極める現代。龍谷大学は人々の心に巣くう闇を照らすべく、2023年4月に「心理学部（仮称）」の開設を予定している（設置構想中）。今や心理的課題の解決には、被支援者だけではなく、家族や知人などの関係者に対する間接的支援も欠かせない。同学部では、こうした集団に対する支援で必要な心理学的知識が身に付くカリキュラムを構築。民間企業や学校現場など幅広い分野で活躍できる人材の育成を目指す。仏教は、世界で初めて心の解明に挑んだ宗教。浄土真宗の精神を建学の精神とする大学ならではの教育に期待が膨らむ。

多彩な研究活動からソーシャルビジネスの起業支援、社会的要請に応える教育の展開まで、ますます勢いを増す龍谷大学の取り組み。「THEインパクトランキング2021」の総合順位で国内私大4位（タイ）に入るなど、その評価は高い。さらに2021年度から、全学的な体制で仏教SDGsをより強力に進めるため、「仏教SDGs推進協議会」を学内に設置した。白石克孝副学長（SDGs担当）はこう語る。

白石 克孝
龍谷大学 副学長

「龍谷大学としてSDGsに向き合うための成果が出始めたからこそ、次のステップとしてそれを支える体制づくりに着手する運びになりました。教職員や各部署が組織の枠を超えて連携し、一丸となって仏教SDGsを推進します。将来的には、全国24法人・72校からなる龍谷総合学園の基盤を生かし、中高大連携での取り組みも視野に入れています」

新たな推進母体を設けて、さらなる飛躍を遂げる龍谷大学。豊かな未来に向けた挑戦は続く。

THEインパクトランキング2021
総合順位「国内私大4位」にランクイン

龍谷大学は、強みを生かせる分野として下記の目標にエントリー。総合順位で国内私大4位（タイ）に入るとともに、目標17の「SDGs教育」において特に高い評価を受けた。

University Information
龍谷大学 RYUKOKU UNIVERSITY
〒612-8577 京都府京都市伏見区深草塚本町67
URL:https://www.ryukoku.ac.jp/

立ち上がる未来世代 Youth Action

龍谷大学が推進する「仏教SDGs」では、持続可能な社会を担う人材の育成も取り組みの重点テーマとして挙げられている。

社会問題に向き合う在学生からソーシャルビジネスを立ち上げた卒業生まで、多岐にわたるフィールドで行動を起こす若き挑戦者たち。

確固たる信念と尽きることのない情熱を原動力に、未来を切り開くその姿を紹介する。

卒業生

株式会社 アカイノロシ

代表取締役　矢野　龍平
［政策学部　２０１８年度卒業］
取締役　三輪　浩朔
［政策学部　２０１８年度卒業］

タイの少数民族がつくるコーヒー豆を輸入・販売。持続可能でフェアな流通の実現へ

アカ族は、タイ北部の山岳地帯に暮らす少数民族です。その昔、タイ北部では麻薬栽培が行われていましたが、王室主導でコーヒーなどへの作物転換が行われました。現在では主にコーヒー栽培で生計を立てているのですが、現金収入になりにくいという課題を抱えています。私たちは学生時代、ゼミ活動の一環で現地を訪れ、コーヒー豆の生産工程をともに体験する中で、その味わいに感動。アカ族のすばらしいコーヒーをより広く届け、生産者の所得向上や雇用創出にも貢献したいと考えるようになりました。

帰国後、学内のビジネスプランコンテスト「プレゼン龍」への出場を経て、在学中に設立したのがアカイノロシです。現地の農園に通って生産から関わり、輸入・販売を実施。サステイナブルな取引を実現し、アカ族のコーヒー豆を中心に多彩な商品を提供しています。２０２０年10月には、京都・西陣に自家焙煎コーヒー専門店「Ｌａｕｇｈｔｅｒ」をオープンしました。今後はタイ政府との連携も深めながら事業を拡大し、取り扱う商品の幅を広げる予定です。環境や社会への配慮という理由ではなく、「本当にいいものだから買おう」と思ってもらうため、品質にはいっさい妥協しません。ＳＤＧｓに興味がなくても、当社の商品を買うことで自然とその利益が誰かに還元され、持続可能な社会の実現につながっていく仕組みを構築したいです。

共同創業者である矢野さん（写真左）と三輪さん（写真右）

卒業生

株式会社 革靴をはいた猫

代表取締役　魚見　航大
［政策学部　２０１６年度卒業］

靴磨きを通して、障がいの有無に関係なく誰もが輝ける社会を目指す

革靴をはいた猫は、あらゆる若者が挑戦する機会をつくり、インクルーシブ（誰も排除しない）な社会を目指す靴磨き・靴修理の専門店です。学生時代に、障がいのあるスタッフが働く学内カフェ「樹林」と接点を持ち、誰もが成長し活躍を促す場を作りたいと考えたことから靴磨きに注目。在学中に当社を設立しました。樹林で出会った障がい者手帳を持つ2人は、今では職人として会社を支えています。靴修理も全国屈指の職人から学んだことで、靴の相談窓口としてお客様から愛され、新メンバーに技術を教えるまでになりました。「障がいとは可能性を見限ること」です。先入観でその人の可能性を判断してしまうと、潜在的な力は開花しません。必要なのは、共通の目的を持ってお互いに高め合う仲間との関係性だと実感しています。

また、職人の育成には練習用の靴が欠かせません、そこで、皆様が履かなくなった靴の寄付回収を行う「手放す貢献プロジェクト」も始めました。すでに１３００足を超える靴が集まっており、磨いて修理すれば履ける靴に関しては再生販売も行っています。童話『長靴をはいた猫』は、何もできないと思われていた猫が、長靴をもらい果敢に挑戦していく物語です。世の中には活躍できずに埋もれている可能性がたくさんあります。「靴」をきっかけに、障がいの有無を超えて、あらゆる若者が輝ける社会にしたいです。

革靴をはいた猫のメンバーと（写真右が魚見さん）

在学生

ぶどう山椒の発祥地を未来へつなぐプロジェクト

経営学部　藤岡ゼミ

学生主体で引き出す新商品を開発し、山椒産地の豊かさを守る

大粒で香り高い「ぶどう山椒」の発祥地である和歌山県有田川町は、後継者不足や高齢化により山椒農家の数が減少しています。２０１９年、産地の存続を危ぶむ有田川町の要請を受け、藤岡ゼミがスタートさせたのが「ぶどう山椒の発祥地を未来へつなぐプロジェクト」です。ゼミの学生たちは、ぶどう山椒の認知度や山椒製品についての調査を行い、市場拡大の可能性を模索。現地で収穫も体験し、農家との交流を重ねました。そこから素材の魅力が生きるアイデアを出し合い、ドレッシングやクッキー、マドレーヌ、せっけん、お香など50点ほど試作を実施。検討を重ねた末、食品メーカーの協力も得て、オリジナルカレー作りに着手します。調査研究、商品開発、企画運営の3グループに分かれてマーケティング活動に励み、働く主婦を想定ターゲットに設定。冷凍カレーを郵送することで、多くの方に家庭で手軽に楽しんでもらおうと考えたのです。

完成した商品「ぶどう山椒の陽」は、２０２１年1月にオンライン販売を開始し、有田川町の観光施設でも提供されるようになりました。売り上げの一部は苗木の購入資金に充て、産地の存続の一歩として有田川町のぶどう山椒園地に植える予定です。商品を通して、ぶどう山椒のファンや作り手を増やし、地域活性化に貢献していきます。

ぶどう山椒の産地、有田川町で収穫を体験する学生たち

社会起業家を輩出する 龍谷大学の人材育成

「㈱アカイノロシ」や「㈱革靴をはいた猫」をはじめ、さまざまなソーシャルベンチャーを輩出している龍谷大学。若き社会起業家はどのような環境で育まれるのか。学生ベンチャー育成事業に携わってきた深尾学長補佐に話を聞いた。

近年、ますます増加するソーシャルベンチャーの起業

――龍谷大学には、起業家が育つ気質があるのでしょうか？

学生ベンチャー育成事業の中核を担ってきたのは、龍谷エクステンションセンター（通称REC）です。1991年に瀬田キャンパスで開設した当初から、コミュニティ・アイデンティティーを重要視し、大学の施設・設備を地域に提供する施設開放事業などを行ってきました。レンタルラボやインキュベート施設の入居率が高く、地域の中小企業との共同研究の場としても発展。RECの特性を見ても、本学は地域とのお付き合いを非常に大事にしてきましたし、地域の持続性に貢献していくというSDGs的な考えが、30年前からすでにありました。大学発ベンチャーの担い手となる学生の発掘・育成を担う事業がスタートしたのは2001年のこと。在学中の学びから問題を発掘し、その問題構造を分析・作成したビジネスプランをブラッシュアップしながら、起業へとつなげてきました。昨今は、ソーシャルベンチャーの起業が相次いでいます。他者の幸せを願い、社会がよりよくなればいいという考えは、先輩学生たちからずっと受け継がれてきたもの。SDGsが社会の脚光を浴びて、社会が変わり、メインストリームになってきた流れがありますが、本学はこれまでも研究と教育、そして社会貢献を統合していく発想を持ち続けてきました。その発想の継続が大きな実績につながっていると感じます。

深尾 昌峰
学長補佐／政策学部 教授

「疑問」から課題を見いだしビジネスに昇華させる

――ソーシャルベンチャーの起業家は、どのように育まれるのでしょうか？

現場での「問題」との出会いがすべての原点です。例えば、鹿肉の販売で地域との連携を深める「㈱RE-SOCIAL」は獣害被害に隠された問題が発端でした。学生はフィールドワークで、農作物に被害を与える野生動物がどんどん殺され、埋められている様子を目の当たりにしたんですね。害獣だからしょうがないと終わらせず、このままでいいのかと疑問を持ち続けて、命を大切にいただくジビエ肉の販売に発展させた。この最初に疑問を持つところが重要なのです。

「㈱革靴をはいた猫」という靴磨きビジネスが動き出したきっかけも、1カ月間働いて1万6000円しかもらえないという、障がい者の人たちの現状に学生が疑問を持ったことでした。福祉業界の人たちは当たり前の金額だと言うけれど、おかしいんじゃないかと。現状に対して疑問を持てる力、そこでの大きなインパクトが起業のエネルギーになっていくのです。事業としてどう組み立てるか、支援者や金融機関とどう話し合いをするかという知識・ノウハウは講座で教えられますが、課題はそれぞれの学生が出会うしかない。学生たちがいろいろな場所で得た経験が課題につながります。課題が定まれば、さまざまな専門家たちが一緒に議論したり、時にはビジネスプランを突き返したり。学生たちは大学という資源を利用して、能動的に起業家を目指します。

起業家精神と深く関わる行動哲学「自省利他」

――これからの起業家には何が求められるのでしょうか？

まずは世の中の決まった善悪や常識を疑ってみる。当たり前をいかに排していけるかが大切です。だから学生には変人になれと伝えています。変人とは、変わった人ではなくて、変える人。変える人は変人扱いされますが、驚異を抱かれるというのは、ある意味イノベーターとして成功の証。常識的な空気を読んでばかりでは、新しい世界はつくれません。若者たちには、より公正で公平な社会をつくる変人でいてほしいですね。

昨今の学生が練り上げたビジネスプランは、ソーシャルなものが増えています。全学必修科目「仏教の思想」も、学生の考えに根付いていると思います。利他的な精神を入り口として、経営を組み立てていける。さらに、他者のために行動を起こし、社会問題の解決を目指す社会起業家育成プログラムを通して、どう生きていくかを探求できる。仏教の教えが知らず知らずのうちに自分の人生と重なっていく、そんな環境が本学にあります。ソーシャルベンチャーを志す人は、困った人がいる社会を変えたいという気持ちがあり、みんなで利益をシェアしながら社会をデザインしていきます。起業に向かって進む学生たちには、多様な人々と協力して、その思いを束ねていける能力がある。そんな彼らに大きな期待と誇りを抱いています。

▶本記事は、下記「ReTACTION」のインタビュー記事から抜粋・編集して掲載しています。

みんなの仏教SDGsウェブマガジン

ReTACTION

教育・研究や社会貢献の諸活動など仏教SDGsの取り組みを発信するプラットフォームが誕生

「ReTACTION（リタクション）」は、2021年6月にオープンした特設サイトです。「ReTA（利他）＋ACTION（行動）＝自省利他に基づいて行動する」、「Re（再）＋TACTION（触覚）＝今一度、感覚を研ぎ澄まし、世界に触れ、持続可能な社会につながるヒントを得る」という2つの意味を込めています。仏教とSDGsを結びつける龍谷大学だからこそのアプローチで、教育・研究、社会貢献の諸活動を社会に発信。龍谷大学は、意識改革と実践的な活動の両輪でSDGsを推進していきます。

インタビュー記事をはじめ、多彩なコンテンツをご覧ください！

ホームページ https://retaction-ryukoku.com/

Re HUMAN
ジェンダー／福祉／健康／人権
ジェンダー、身体的特徴、文化…これまで違いと認識してきたものを多様性として受け止め、多様性自体を社会のパワーに変える活動。

Re NATURE
環境保全／生物多様性／エネルギー
あらゆる生命と暮らしの基盤である地球。海、森林、川や湖といった自然と、そこに住む生物が共存するための持続可能な研究や活動。

Re REGIONAL
地域活性化／コミュニティ／働きがい
自然、文化、インフラ環境、資源…それぞれの地域が抱える問題を理解し、持続可能な地域のあり方を探求する研究や活動。

共通のカテゴリー

お問い合わせ先

RYUKOKU UNIVERSITY
龍谷大学

学長室（広報）
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
TEL：075-645-7882　FAX：075-645-8692
URL：https://www.ryukoku.ac.jp

東洋経済 ACADEMIC | SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

We support the Sustainable Development Goals (SDGs)